

語彙調査とコーパス

語彙調査とは

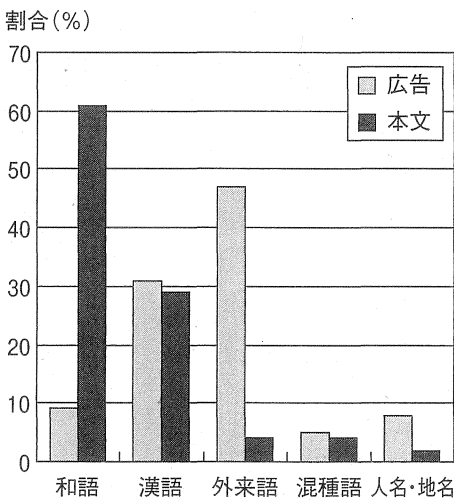
国立国語研究所は、昭和二三年の創立以来、一貫して現代語の書き言葉・話し言葉の両面にわたり、科学的な調査研究を行ってきました。書き言葉についての調査研究の大きな柱として取り組んできたのが語彙調査です。語彙調査とは、統計学的方法論に基づいて調査対象から標本を抽出し、そこに現れた語彙を数量的に把握することを目的とした調査です。欧米で一九世紀後半ごろから教育基本語彙の選定や速記法改善のための基礎調査などの実用的な目的で行われたのが始まりと

表 国立国語研究所の語彙調査

調査対象 (調査対象の年代)	語数*
①新聞1か月 (昭和24年6月)	24万
②婦人雑誌 (昭和25年)	15万
③総合雑誌 (昭和28~29年)	23万
④郵便報知 (明治10年11月)	10万
⑤雑誌90種 (昭和31年)	53万
⑥新聞3紙 (昭和41年)	300万
⑦高校教科書 (昭和49年)	59万
⑧中学校教科書 (昭和55年)	25万
⑨テレビ放送 (平成元年4~6月)	14万
⑩雑誌70誌 (平成6年)	105万

* 「語数」は、延べ語数。

図 上位100語の語種の比較



言われています。国立国語研究所がこれまでにやってきた語彙調査を表にまとめました。調査対象は、新聞、雑誌、教科書、テレビ放送など、いづれも生活に密着した媒体です。これは、国民の言語生活の向上を目的とする国立国語研究所の基本方針と一致しています。

語彙調査の結果から

語彙調査の結果は、使用頻度に基づいて整理された「語彙表」という形で表されるのが一般的です。すなわち、どのような言葉がどのくらいの頻度で使用されたかが分かる一覧

表です。集計の範囲や組み合わせる属性によつて、さまざまな語彙表を作り、分析することが出来ます。例えば、図は、⑩の調査において、雑誌の本文でよく使われた語と広告でよく使われた語のそれぞれ上位一〇〇語の語種を比較したものです。語種とは、和語・漢語・外来語等の区別を言いますが、ここでは便宜上人名・地名を含めました。漢語の比率が同程度なのに対し、和語と外来語の比率がほぼ逆転していることが分かります。なお、⑩の調査結果は国立国語研究所のホームページから入手できます。

コーパスと語彙調査

目下、国立国語研究所では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の構築を進めています。このコーパスの中には、語彙調査に適した設計のサブコーパスとして、書籍、雑誌、新聞から一〇〇万語分のデータが格納されることになっています。

語彙調査の方法論は、表の⑤の調査で確立した古い技術に基づいています。しかし、今後大規模なデータを扱うに当たっては、従来の手作業主体の調査から処理の自動化へと転換する必要があります。コーパスの登場で、語彙調査は新たな方法論の開発の時代に入ったと言えるでしょう。

(研究開発部門言語資源グループ長 山崎 誠)

敬語の本質は何か？

春は敬語が気になる季節

新年度の活動が本格化する五月。若い新入社員の中には敬語の使い方で悩んでいる方がいるかもしれません。敬語が気になるのは新入社員だけではなくベテランの方も、若い人の敬語を聞いて気になっているかもしれません

ん。春は敬語が気になる季節です。

目上の人に対する敬語意識

職場で敬語がよく使われるのは、社外の人に接するときと、社内の目上の人に接するときでしょう。ベテランの人で若い人の敬語が気になるのは、社内での敬語かもしれません。自分が若いころは目上の人にはしっかりと尊敬語を使い「いらっしゃいますか？」と言っていたのに、今の若い人は「来ますか？」くらいであって、何だか自分が軽くあしらわれているようだとお感じの方もいるのではないのでしょうか。

これに関連する調査データがあります。国立国語研究所が一九九七年に東京都在住者約一〇〇〇人に調査したところ、学校の先生に

敬語の本質は使用の落差

では、若い人は敬語をしようという意識が希薄になっていくのかというと、そうでもないようです。敬語を敬語たらしめる言葉の原理は何かと考えると、その表現を使う相手と使わない相手との「落差」があることと言えます。敬語というとしても「使用」に意識が向きがちですが、相手によっては「使わない」こと、つまり使用に落差があり、使い分けがなされていることが重要なポイントとなります。

図2・3は、国立国語研究所が一九九〇年に東京都の中学生約二五〇〇人を調査した結果です。グラフ中に示した自称詞について、六人の相手ごとに「使う」と回答した割合を示したものです。「使う」の数値は相手により落差があり、使い分けをしていることがよくわかります。つまり、敬語の意識は若い人ももっていると言えます。ただ、従来のような敬意の高い敬語は必ずしも必要ではないという意識に変化してきているようです。

(研究開発部門「言語生活グループ」主任研究員 尾崎書光)

図1 東京都在住者の敬語意識

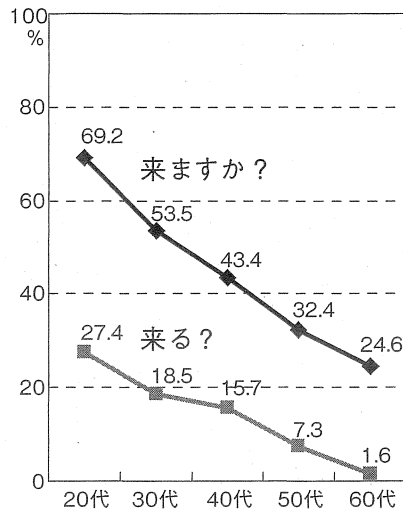


図2 東京都の中学生・男子

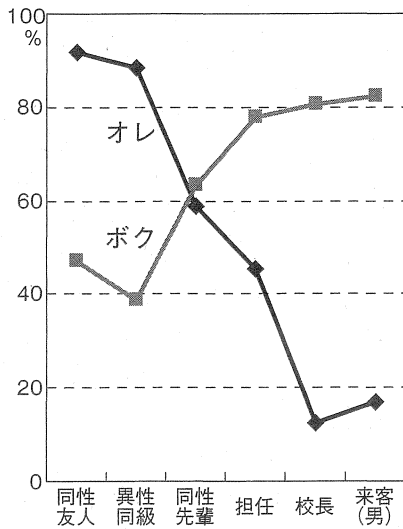
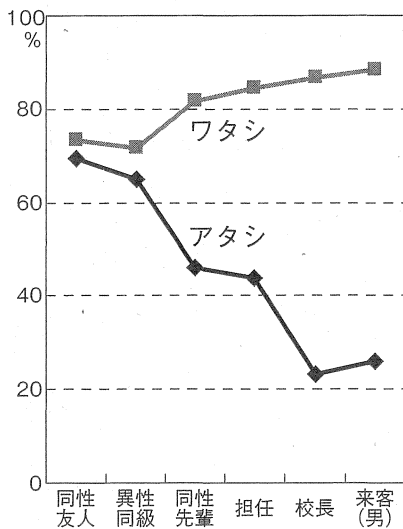


図3 東京都の中学生・女子



聞き取り試験は何を測っているか

日本語と国語の聞き取り試験

一般的に聞き取り試験というと英語のリスニングテストの印象が強いのではないだろうか。実用英語技能検定やTOEICでもおなじみですし、平成一八年度からは大学入試センター試験にも導入されました。しかし、外国人に対する日本語教育や、公立高校入試の国語でも聞き取り試験は行われています。

日本語教育で代表的な試験に、日本語能力試験と日本語留学試験があります。聞き取り試験は日本語能力試験では教室を含めた日常生活場面を対象として「聴解」、日本語留学試験では日本の大学等で学ぶために必要な場面を対象として「聴解」「聴読解」が行われています。

一方、あまり知られていないと言っていると思うのですが、八つの県で公立高校入試の国語で聞き取り試験が行われています。最も早かった青森県は三〇年近くも前の昭和五四年度入試に「放送による検査」を国語に導入しました。その後、少し期間が空いて沖縄県（平成六年度入試より）、佐賀県（平成七年度入試より）、山口県（平成一一年度入試より）、島根県（平成一五年度入試より）、鹿児

島県（平成一六年度入試より）、岡山県（平成一八年度入試より）、千葉県（平成二〇年度入試より）と導入が続いています。特に千葉県での導入は首都圏での初めての導入ということもあり、注目度が高く新聞各紙でも報道されました。

聞き取り試験は何を測っている？

日本語教育における聞き取り試験は、外国語としての日本語の試験ですので、日本人が英語のリスニングテストを受けるようなものと思えば、それほど違和感はないかもしれません。しかし、国語の聞き取り試験については、「日本人なら日本語を聞き取れるのは当たり前ではないか」と不思議に思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

このことを考えるには、「日本語を聞き取れる」ことがどういふことなのかを考える必要があり、それはつまり「聞き取り試験は何を測っているか」を考えることとなります。

例えば、日本語能力試験の「聴解」は一級でも短いものなら一五〇字ほど、長いものでも五〇〇字程度です。『日本語能力試験出題基準（改訂版）』（凡人社）では、「聴解試験

で測られるもの」として、「構文・語彙の能力」「情報を正確に聞き取れる能力」「聴解行動能力」を挙げています。このうち「聴解行動」は「このコミュニケーションの行動のそしてさらに広くは課題解決のための知的行動の一部」と定義され、この定義に基づき「学習者が出会う教室をも含めた日常生活の中の課題」が取り上げられています。

それに対して、公立高校入試の聞き取り試験は非常に多彩であり、テーマとしては「修学旅行に向けての学年集会（約五五〇字、千葉県平成二〇年度入試）」、「日本の古代の色についてのグループ発表（約一〇五〇字、青森県平成二〇年度入試）」のように、学校場面で実際に聞く種類の問題もありますし、「短歌の論評（約八〇〇字、山口県平成二〇年度入試）」、「外来語についての講演（約一五五〇字、沖縄県平成一九年度入試）」といった説明文に近いものもあります。これらの聞き取り試験は、比較的問題が長いこともあり、メモを取る能力も問われます。また、課題解決というよりも読解と同じく本文に対する判断力や思考力を測っているとも言えます。つまり、「日本人なら日本語を読み取れるのは当たり前」でないのと同じく、「日本人なら日本語を聞き取れるのは当たり前」ではないと言えるでしょう。

（日本語教育基盤情報センター評価基準グループ研究員

森 篤嗣

辞書にないけど「正しい」言葉

辞書に求めるもの

いわゆる「日本語本ブーム」は少し落ち着いてきましたが、言葉に対する関心をもつ方は多いようです。特に関心が高いのは、自分の使い方が「正しい」かどうか、「正しい」のはどちらの使い方かという、「正しさ」に関する事のように思われます。しかし、何をもって「正しい」とするかというのは、それほど簡単なことではありません。

「正しさ」を考える上でひとつの基準となるものは辞書です。辞書に載っているから「正しい」、辞書の説明と一致するから「正しい」、というのは非常に説得力があります。知らない言葉の意味を調べるといって機能だけでなく、言葉の「正しさ」を測る道具としても辞書は期待されているわけです。

しかし、辞書に載っていないし、初めは違和感を感じるけれども、なんとなくあってもおかしくないと感じられる言葉もあります。

言葉の裏にある決まり

たとえば、次のような例を考えてみましょう

う。「肉を焼く」に対して、「肉に十分火が通った」ということを「肉が焼けた」と言います。では、「肉を炒める」の場合はどうでしょうか。ちよūdい言い方が思いつかないという方と、「肉が炒まった」と言うという方とに分かれるのではないかと思います。実はこの「炒まる」という言葉はほとんどの辞書には載っていません。辞書に載っていないかどうかでだけ「正しさ」を判断するとして、「炒まる」は「正しくない」ということになります。しかし、「炒まる」は使われないという方でも、言いたいことは理解できるのではないのでしょうか。ここで次の表を見てみましょう。

焼く	焼けた
切る	切れた
つぶす	つぶれた
ほぐす	ほぐれた
揚げる	揚げた
混ぜる	混ぜた

上下の対応にはいくつかの決まりがあるのがわかるかと思えます。言葉に対して違和感を感じるのは、その言葉自体が見慣れない

(聞き慣れない)ということと、言葉の裏にあるような決まりに外れているということとの両方の可能性があります。

新しい言葉の生まれるところ

さきほど見た表を考えると、「揚げる(混ぜる)」の場合は、動詞語幹の最後のエ段の音(「揚げ」の「げ」)がア段の音(「が」)に変化しているの、同じ決まりを当てはめれば「炒める」が「炒まった」になってもいいような気がします。このように「ある決まりからするとあってもおかしくないのに、なぜか存在していない」ことを言語学では空き間(あきま)と言います。「炒まる」もそのひとつです。もともと「あってもおかしくない」存在なので、見慣れないことによる違和感はあるても、「正しくない」とは断言しにくいところがあります。

現在はまだ、「〜が炒まったら」の形での使用が多く、「炒まった肉」のような形での使用は少ないようですし、十分に市民権を得た言葉とは言えないかもしれませんが、決まりに従って生まれた言葉であれば、違和感を感じる人も次第に減ってきて、いずれは「正しい」言葉になっていくのかもしれない。

(日本語教育基盤情報センター)

用例用法グループ 植木正裕

語種から見た現代の書き言葉

書き言葉は、新聞・書籍・雑誌・インターネットなどの媒体によって分類することができます。そして、これら媒体の違いによって、そこで使われている言葉にも違いが見られます。

それぞれの媒体で使われている言葉の違いを明らかにするための視点はいくつかあります。ここでは語彙、その中でも特に語種という点から、媒体によって使われている言葉にどのような違いがあるのか見ていきます。

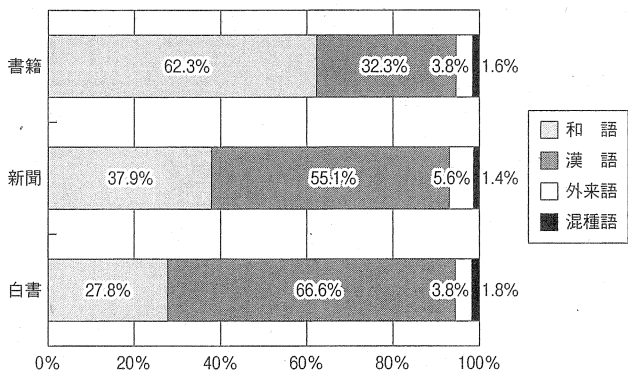
語種とは

語種とは、語をその出自によって分けた種類のことです。日本語では一般に、和語・漢語・外来語と、これら三種類のうち異なる二種類以上の語が結合した混種語の四種類に分けられます。和語は日本固有の語（例・休み）、漢語は近世以前に中国から入った語（例・休暇）、外来語は欧米の諸言語から入った語（例・ビール）です。漢語・外来語には、それぞれ和製漢語（例・返事）や和製英語（例・ナイター）もあります。

語種比率の比較

国立国語研究所が構築を進めている現代日

図 書籍・新聞・白書の語種比率



本語の書き言葉のデータベースである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から、平成一三年〜一七年の五年間に刊行された書籍・新聞の二つの媒体のデータと政府刊行白書のデータを取り上げ、それぞれの語種比率を比較します。なお集計に当たっては、人名・地名などの固有名詞や助詞・助動詞、数詞を除き、いわゆる一般語を対象を限定しました。書籍・新聞・白書の語種比率をグラフに示

しました。グラフを見ると、書籍の和語の割合が六割を超えているのに対し、新聞は三七％、白書はさらに低く二八％にとどまっています。一方、漢語の割合を見ると、書籍は三割台にとどまっているのに対し、新聞は半数を超え約五五％、白書はさらにそれを一〇％程度上回り約六六％となっています。外来語は、書籍・白書が共に三・八％であるのに対し、新聞は約二％高い五・六％です。書籍が和語を主体とした表現であるのに対し、新聞・白書は漢語を主体とした表現であることが分かります。新聞には見出しを中心に「履歴管理制度、食品全般に拡大」「消費者行政強化」のように漢語を用いた表現が多く見られます。また白書は各省庁の年次報告という性質上、法律用語や行政の専門用語が多く用いられます。これらのことが新聞・白書における漢語の比率の高さにつながっていると考えられます。

おわりに

今回、語種比率の調査に使った『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は、平成二二年度末の完成を目指して構築を進めています。完成すると約一億語という大規模なデータとなります。このコーパスには語種のほか品詞など、国語の研究に必要な様々な情報を付与します。今後、これらの情報を使って媒体ごとの言葉の特徴などをより詳細に明らかにしていくことができるようになります。

（研究開発部門言語資源グループ 研究員 小椋秀樹）

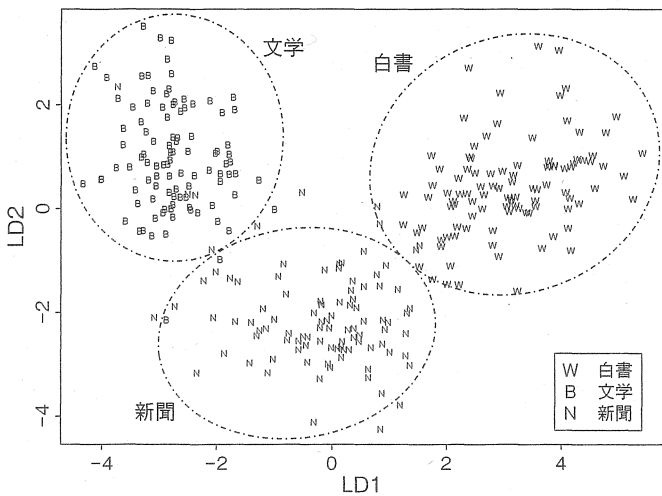
白書の文の特徴を調べる

白書は黒い

さまざまな省庁から刊行される白書。これらを見て共通して思うことがあります。それは「漢字が多くて紙面が黒い」ということです。本当に白書には漢字が多いのでしょうか。書籍（文学）と比べてみましょう。

文化庁では、重要無形文化財の保持者に対

図 白書、文学、新聞の判別



し、技の練磨向上と伝承者の養成のための特別助成金を交付するとともに、保持者又は保持団体等が行う伝承者要請事業に対して補助を行っている。

《文部省平成一一年度『我が国の文教施策』》

右隣に寝ている娘の横顔を半身の姿勢で見ながら話しかけていたことを思い出した。三宝はスースーと軽い寝息をたてている。軽く開いた口元に、まだあとけなさが残っている。

《高山路爛『わが愛はやまず』》

確かに白書には漢字が多そうに見えます。調査したところ、白書では文学の約二倍の漢字が用いられていました。

白書は長い

上で引用した例を見てすぐに気付く特徴がもう一つあります。それは白書は一文が長いということです。引用した部分の文字数はほぼ同じですが、文学は三文で構成されているのに対し、白書は全体で一文です。調査では、白書の文の長さは文学の約二倍でした。

白書の文体

これらの差は、白書と文学の文体の差と考えることができます。例えば白書に漢字が多いのも、漢字の熟語を複雑に組み立てるような文章が多いことの現れと考えられます。

本当に白書や文学に固有の文体といったものがあるのでしょうか。このことを確かめるために、文の長さや名詞を含む比率など、文体に関係すると考えられる一二の特徴を用いて、白書、文学、新聞（各五〇〇サンプル）を対象に、各サンプルのグループを推定するモデルを作りました。分析法は線形判別分析というものです。その結果、九五%という高い確率で各サンプルのグループを推定することができました。モデルに従って推定した結果を上図に示します。

図から、文学に属するサンプルは左上、新聞は中央下、白書は右上に集中して分布していることがわかります。つまり、グループごとに共通した文の特徴があるということですね。また図から、文学と白書がかなり異なる特徴を有し、新聞がその中間に位置することも見てとれます。

白書は黒い。この程度の印象で開始した分析ですが、白書が小説や新聞とはかなり異なる文章だということがよくわかります。

（国立国語研究所研究開発部門研究員 小磯花絵）

「ていたらくな自分」

ある謝罪会見で

二〇〇六年一月、ある大手ホテルチェーンが条例等を見逃して建築を行ってきたことが発覚しました。批判を浴びたこのチェーンの社長は、翌月六日謝罪会見を行い、次のようなごんげの言葉を述べました。

・「本当に、ていたらくな自分だと思つてます」

「ていたらく」という語は「体たり」のク語法（主に奈良時代に行われた、活用語に「ク」が付いて「くすること」という名詞句を作る語法）が語源で、本来は〈様子、状態〉という意味です。今日では、

・そういった学習態度のため成績はたちまち下落し、卒業時には四百数十人中、ビリから数人目という体たらくでした。（森沢洋介『英語上達完全マップ』ベレ出版）
のように〈好ましくない様子、状態〉を指して使います。

この社長が使った「ていたらくな」という形は形容動詞「ていたらくだ」の連体形で、〈ダメな〉〈情けない〉という意味と思われま

すが、現行の国語辞書は「ていたらく」に形容動詞としての用法は認めず、そのような意味も載せていません。

辞書にない使い方

しかし、このような「ていたらくな」、さらに〈ダメさ加減〉というような意味の「ていたらくぶり」といった、辞書にない使い方の例はあちこちに見られるのです。

・早稲田大学を留年し、卒業式にも出ていない体たらくな人間だからだ。（江上剛「街かど経済散歩」『朝日新聞（東京本社版）』二〇〇八年三月一九日付朝刊）

・こんなていたらくな自分というものを、自分なりに分析してみるに、（泡田周『老いぼれペンキ屋のゴタク』文芸社）
・そんな体たらくぶりがのびただけを苦しめているのなら、まあ自己責任ともいえる。（横山泰行『ドラえもん学』PHP研究所）

・後継世代の体たらくぶりに「我々の世代で世直しを」との思いを強めたそうだ。（『緩話急題』『読売新聞（東京本社版）』

二〇〇八年一月二二日付朝刊）

なぜこのような使い方をされるようになったのでしょうか。その背景には、前述のような語源が現代人には意識されなくなったことがあります。停滞、低落、たらたら、墮落といった音の近い語に引かれて、「とにかくダメでレベルが低くてだらしがない、ということなんだ」という意味解釈をする人が増えてきたのではないかと考えられます。

「ていたらく」の運命

それでは「ていたらく」は今後どのような意味・用法で使われていくことになるのかというと、そうとも言い切れません。二〇〇六年六月に都内のある私立大学の学生一三二名を対象にこの語の意味・用法についてアンケート調査を行ったところ、全体の約一割にあたる一二名が、「この言葉自体きいた事がない」「初めて見ました」のように書いてきたのです。正直にそう書かなかった学生も少なからずいると思われ、意味・用法以前に「ていたらく」という語自体を知らない若年層が無視できない率で存在することは確実です。そうなる今後この語は次第に使われなくなり、何十年か後には「死語」となってしまうかも知れません。

（情報資料部門・文献情報グループ主任研究員

新野直哉）

コーパスで探る日本語の姿——外来語

外来語は増えている？

「外来語が増えている」とよく言われますが、ここ一〇年の新聞の語彙調査では、外来語の比率は大きくは変わらないという報告があります。ただ、注目すべきこととして、和語や漢語に比べ、外来語は語の入れ替わりが多いという結果が出ています。つまり、増える外来語が多くある一方、減るものも多いということのようです。

その姿を「新聞コーパス」で探ります。毎日新聞と読売新聞の一四年分の記事データを用い、外来語の出現率の推移を調査しまし

図1 「コンプライアンス」出現率

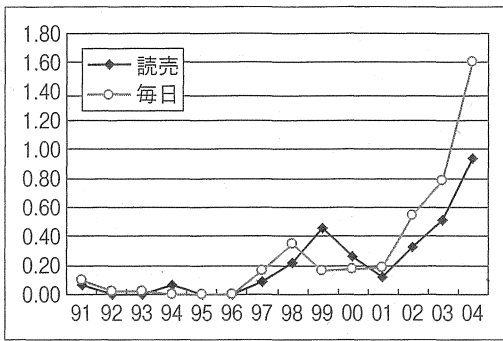


図2 「コンセンサス」出現率

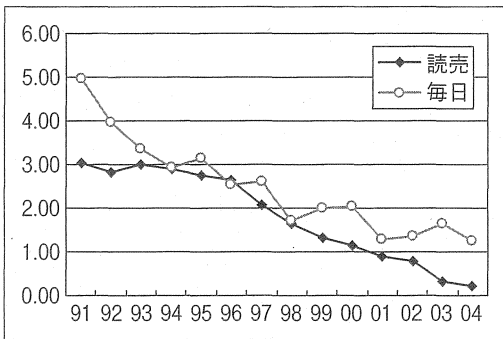


図3 「マルチメディア」出現率

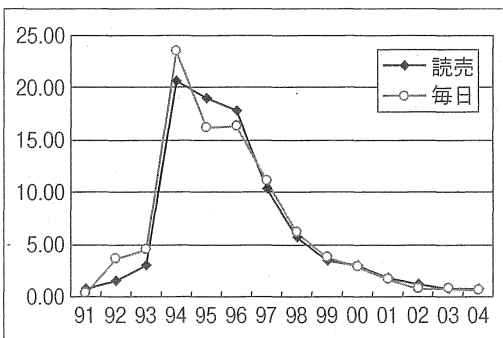
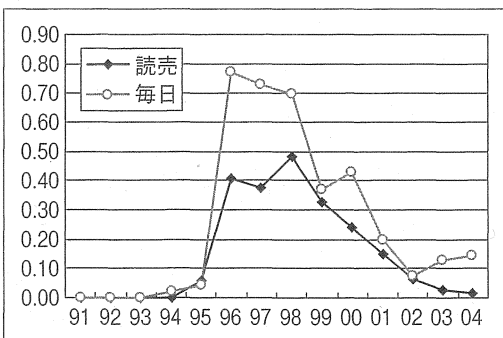


図4 「アカウントビリティ」出現率



た。対象は、国立国語研究所が「外来語」言い換え提案で扱った語です。

出現率が増える外来語、減る外来語

図1では、主に企業の法令遵守のことを言う「コンプライアンス」が右肩上がりに増えていることがわかります（図の出現率は一〇万分の一の表示。以下同様）。一方、図2では「コンセンサス」がほぼ一直線に減っています。「合意」や「総意」といった従来からある表現の使用に戻っていったためと考えられます。このように、増える外来語がある一方、減るものもあることがわかります。

出現率が短期間に増えて減る外来語

調査結果のうち、もつとも多かつたのは、短期間のうちに増加と減少の局面を見せ「山型」のグラフになるものでした。図3では「マルチメディア」が九四年までに一気に増えた後に大きく減っています。新聞ではニュース性がなくなると使用が減るようです。図4では、同じく「アカウントビリティ」が増えた後に減っています。こちらは徐々に「説明責任」として言い換えられることが増えてきたためと考えられます。

様相変化の大きい外来語

つまり、外来語は、単純に増大しているのではなく、社会の動きや人々の関心を受け、時の流れにつれて大きくその様相を変化させていることが「新聞コーパス」からわかります。

国立国語研究所が現在構築中の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」には、書籍や雑誌などが広く収録されます。そこでさらにも多様な外来語の姿を探ることができるものと期待されます。

（研究開発部門言語資源グループ 研究員 柏野和佳子）

会話のやりとりと言葉の省略

日常会話での省略

人と話をするときに、私たちはいろいろな形で言葉を省いています。例えば、「東京大学」を「東大」と略したり、「あつ、この店、行ったことある」のように主語や助詞を入れなかつたりします。

そのほか、次のような例も耳にします。

- (1) 次はいよいよ最終回、どうぞお楽しみ。
 - (2) せっかくですが、その日はちょっと予定が詰まっております…。
- 話し手は、なぜすべてを言わないのでしょうか。また、言葉を省くことで何が起きるのでしょうか。

省略の効用

言葉を省略する一つの理由は、言わなくてもわかる部分と言わずに、コミュニケーションを効率的に行うためだと思われまふ。その結果、ときには、きびきびしたリズムの良い口調が生まれます。前記の(1)などはその例です。(1)の代わりに、「次はいよいよ最終回です。どうぞお楽しみにお待ちください」と言ったとしたら、リズムやテンポの良さがさがれてしまうのではないのでしょうか。

省略がなされるもう一つの理由としては、言いにくい部分を言わずにすませようということ

があります。例えば、人に反論したり、不満を述べたりするときには、反論や不満を明言する部分は言わないでおくことも多いのではないのでしょうか。前記の(2)では、誘いを断る際に「言いさしで終わらせることで、「無理です」や「行けません」などの拒絶の言葉を発することを避けています。そしてそれが、申し訳ない気持ちや丁重さを表すという効果に結びついています。

これらの例のように、言葉を省略した発話は、言い方によって、テンポの良さにも、恐縮や配慮の表現にもつながり得ます。

省かれたことの復元

ただし、省略では、何か省かれたことに相手気がつき、その省かれた部分を復元して理解してくれないと、情報が伝わらないままになってしまいます。

次の例では、Bが最後まで言わなかったことをAが引き取って代わりに言っています。

- (3) A…最近、仕事の調子はどう?
B…いやあ、もうあいかわらず。
A…忙しいか。
B…うん、なんだかんだとねえ。

ここでは、AがBの言わんとするところを察して、「忙しいか」と代わりに述べています。対面状況や電話で、じかに話をしていれば、言葉を省略しても、それがきちんと復元され、理解されたかどうか、相手の応答や反応をとおしてその場で確認することができません。

前記の(2)のような場合も、省略部分を相手に察してもらえなければ断りの意図が通じないことになりませんが、談話では言葉ですべてを言わなくても、声の調子や(対面していれば)顔の表情なども使って、それが断り、すなわち相手の意向に添えないことの表明であることを伝えられます。それは、手紙やメールなど、書くことによる伝達にはない強みといえます。

話し手と聞き手の共同作業

話し手の省略したことを復元するときには、聞き手は気づいたり察したりと、普通に口に出されたことをただ聞き取るときよりも能動的に相手の発話にかかり合うことになります。(3)で、二人が共同して一つの発言を完成させていたことなどは、その端的な例です。会話はつねに話し手と聞き手の共同作業で成り立っていますが、話し手が省略したことを聞き手が察して受け取るときには、その共同作業がより明らかにあらわれてくるのです。

(研究開発部門主任研究員 熊谷智子)

「言い訳」はいけない？

はじめに

約束を守れなかった外国人の友人が、謝りつつ、約束を守れなかった理由を詳しく説明し始めたらあなたはどよう思いますか？一般に日本では、「言い訳」はよくないこととされています。しかし日本人なら誰でも、こうした「言い訳」に対して悪い印象をもってしまうものなのでしょうか？

私たちの研究グループでは、外国人の、日本語による言語行動に対し、一般の日本人はどのような評価を行っているのかを見るため、以下のような調査を実施してみました。

調査の概要

まず、日本語を勉強している外国人に、同じ課題で日本語の文章を書いてもらいました。その課題とは、「隣に住んでいる日本人から、『あなたは夜ゴミを捨てているようだが、この町ではゴミは朝捨てることになっている。今後夜には捨てないでほしい』という手紙をもらった。この手紙に対し、日本語で返事を書いてほしい」というものでした。

次に、これらの文章の中から一〇編を選び、一般日本人八人に読んでもらって、一番感じがよいものから悪いものまで順位を付けてもらいました。また作業中に感じたこととできるだけ口に出してもらい、それを録音しました。さらに作業の後で、順位付けの理由についてインタビューをしました。

作業中の発話、およびインタビュー内容は文字化し、文章中のどの部分について言及しているのかを確定しました。そしてその部分をプラスに評価しているか、マイナスに評価しているかを見ていきました。

分析の結果

その結果、評価には予想以上の個人差が見られました。一〇編の文章の中で、四人以上が言及した箇所は二七か所ありましたが、このうち全員がプラス評価、あるいはマイナス評価で一一致した箇所は八か所だけでした。他の一九箇所については、人によって評価の方向性さえ一致しなかったこととなります。

では、どうした場合に評価の方向性が一致しなくなるのでしょうか。今回の調査では、

まず「相手の要求に従えない理由を説明している箇所」において評価の不一致が見られました。「引越したばかりなので、この町でゴミが朝出すことはちよつとわからない」というような箇所です。インタビューを分析すると、こうした「説明」に「言い訳がましさを感ずる人がいる反面、「率直さ」を感じ、むしろ好印象をもっている人も少なくありませんでした。

また、「相手の要求に従えない代わりに新しい提案をしている」という箇所についても評価は分かれました。これまでどおり夜にゴミを出す代わりに、「私のゴミは鉄の桶みたいのに入って捨てるのはよろしいでしょうか」と提案するような箇所です。要求に従わないことを低く評価する人がいる一方で、「自分の頭で考えて解決策を提示している」ということに新鮮さを感じ、高く評価する人もいました。

このように、同じ場面と同じ言語行動に接したとしても、それに対する評価は人によって大きく異なっていることがあります。「自分の評価だけがすべてではない」ということを心に留めておくことは、柔軟な態度で他者のお付き合いをしていくための重要な手助けになるのではないのでしょうか。

(日本語教育基盤情報センター評価基準グループ長

宇佐美 洋)

半世紀に渡る調査研究からみた言語生活 愛知県岡崎市における敬語調査から

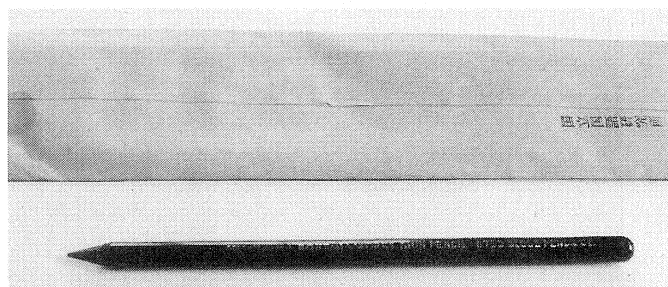
国立国語研究所では、昭和二十三年の創立以来、各地で調査を実施してきました。その扱うテーマも、日々の言語活動、共通語化、方言、敬語、大都市における言語使用、言語行動の日独比較など、多岐にわたります。平成二〇年で創立六〇周年を迎えた国立国語研究所には、これらの調査活動で培われた知見が数多くあります。

平成二〇年一月、愛知県岡崎市で敬語と敬語意識に関する調査が実施されました。この調査は、昭和二八年、昭和四七年に実施された調査の三回目の調査です。調査では、無作為に抽出された岡崎市民とこれまでの二回の調査で協力してくださった岡崎市民が対象になりました。前者には調査が行われた時点での岡崎市全体の特徴を把握すること、後者には個人それぞれの三五年、五五年に渡る変化の有無を明らかにすることに、それぞれ目的があります。一月の調査では、約三〇名の調査員が回答をお願いした方のお宅に直接うかがい、調査を実施しました。

今回の調査では岡崎市民からの協力を得る段階で、「キャッチセールス」や「振り込め

詐欺」などと誤解されることが少なくありませんでした。昨今の治安問題から強い警戒心を持つていらっしゃる方もいらっしゃいました。これも現在の言語生活ならではの特徴です。

このような状況で調査が実施されましたが、調査実施期間中、実に多くの岡崎市民が調査に協力してくださったことが最大の収穫です。前回（昭和四七年）の調査から協力してくださっている方の中には、前回と同じ調



謝礼品として配ったチェコ製の鉛筆

査員が調査を実施することがありました。調査員も調査協力者も三五年ぶりの再会です。このような形で収集されるデータは、国立国語研究所に蓄積されている研究資料の中でも、大変貴重なものになります。

ここで、前回の調査から協力してくださっている方を紹介します。この方への調査が終了した時に、「三五年前の調査のときにもらったものだ」と言つて、前回調査時の調査依頼状を見せてくれました。そのときに謝礼として受け取ったチェコ製の鉛筆（写真）も見せてくれました。「三五年ぶりに使う」と言つて、嬉しそうにその鉛筆を手にしたその方の姿はとても印象的でした。その方は、前回の調査時のことについて、録音機材の大きさ、調査内容についても鮮明に覚えていらっしゃいました。そのうえ、調査員の名前や服装も覚えていたのです。

調査全体から見ると、この方のように、前回調査のことを克明に覚えていらっしゃる方は、実は多くありません。ただ、長い期間をかけて一定の事象を見続けることは、国立国語研究所にしかできない研究課題です。時間をかけてみないとわからない言語事象は、実に多いのです。

なお、先ほど紹介した方が覚えていたと言つた調査員は、私の父親とほぼ同じ年です。国立国語研究所が行ってきた言語調査の技法も、現在の国立国語研究所にはしっかりと引き継がれています。今後も、一月に岡崎市で行われたような言語生活研究が継続されることを強く望みます。

（研究開発部門言語生活グループ研究員 朝日祥之）